

〔研究論文〕

縄文時代中期終末期における集落の様相

—千葉市すすき山遺跡を中心として—

横田正美

1.はじめに

昭和44年に調査されたすすき山遺跡は、縄文中期終末期のみの単純遺跡である。縄文時代中期終末期は縄文時代の変遷過程のうえで後期へと移る大きな変動期であったといえるだろう。それまで各地域ごとの独自の構造と変化の方向性をもっていた土器が、この時期になるとそれらが失なれ齊一性の強いものとなる。また中期末葉から後期初頭にかけての短期間にかけ継続しない集落が多く存在したことなどその例をあげることができよう。

そこで、縄文時代中期終末期の単純遺跡である「すすき山」をもとに、この縄文時代中期終末期について考えてみたい。

2.すすき山遺跡の概要

すすき山遺跡は千葉市源町字すすき山に所在する(第1図)。すすき山遺跡は、都川と合流し東京湾に流入するよし川の支谷に面した台地上に位置する。この台地は、北側および南側に小さな谷頭があり、東西220m、南北150~170m、先端がやや扇状に開いた形をした1つの独立した舌状台地をなしている。この台地上には全域に遺跡は展開するが、縄文時代中期の集落は、この台地の基部近くに偏在している。台上の標高28m前後、水田との比高は12mをはかる。

また、この台地の周辺には縄文時代はもとより各時代の数多くの遺跡が集中している。縄文時代の遺跡では、前期に属する紅嶽台から、西寺山、餅が峰、廿五里北、廿五里、殿台前、東寺山など貝塚を伴う遺跡がある。なかでも廿五里北貝塚や廿五里貝塚のようない100mクラスの環状貝塚が存在し、東寺山貝塚、殿台貝塚と合わせると同一台地上に大貝塚が同時期に存在したことになる。これは、貝塚町に存在する台門、荒屋敷、草刈場、草刈場南、荒屋敷北、荒屋敷東などの貝

塚群に匹敵するほどの密集地域である。弥生時代の遺跡では、わずかに渡戸台遺跡が知られているだけだが、古墳時代になると遺跡数が増加し、集落址では、石神、殿山、西前原、稻毛台などがあり、占墳では、石神、戸張作、駒形、蓮台場、浅間などの古墳群がある。

このように、すすき山遺跡周辺には数多くの遺跡が集中し、千葉市内でも最も集中している地域であると言え、この地域が各時代を通して重要な位置を占めていたと言えるだろう。しかし近年の園地造成等の行為により調査もされずに消滅してしまった遺跡も散多い。これらの遺跡の中で、縄文時代の遺跡で特に注目されること、東寺山台地の西側と東側の遺跡で性格を異にしていることである。つまり西側では貝塚を伴うものが少なく、東側では大型の貝塚を形成するということである。このことは、この地域の歴史的な意義を探るうえで留意しなければならないことであろう。

昭和44年に、加曾利貝塚博物館に依って発掘調査がおこなわれ、台地東半部において10基の方形周溝状遺構(遺構内から発見された土器片および須恵器片から、国分期に属すると推定される)10基、縄文時代中期に属する住居址11基、および11基以上の中空穴が発見された。

3.出土土器について

すすき山遺跡出土の土器はすべて縄文時代中期末期である(第2図)。貝塚博物館紀要の報告の中で、これらの土器はキャリパー形を呈する深鉢形と網部の膨らんだ浅鉢形とに形態を2大別し、さらに文様別に5類に分類している。この文様別5分類は、次のとおりである。

1類・縄文地に微隆帯による懸垂状区画文を配し、その内部をすり消したもの(第2図2・8・10)。

2類・沈線によるすり消縄文を配したもの(第

第1図すき山遺跡と周辺の遺跡



2図3・9・11)。

3類・繩文装飾のみのもの(第2図4~6)。

4類・微隆起文のみのもの(第2図1)。

5類・無文土器(第2図7)。なおこれにはさら
に列点文や瘤状突起が組み合わされる。

これらの土器のうち、1・3・7・9・10・11
は住居址内出土の土器である。

1は、No.8号住居址内より出土した小型の注口
土器で、文様は断面三角形の微隆起起線による曲線
文を主体とする。口縁部と胴部には横筋の無文帯
がある。

3は、No.6号住居址内覆土より出土したもの
である。2類に属し、口縁部に細かい列点が附され
ている。

9・10・11は、No.11号住居址床面直上より出土
したものである。9は、2類に属し太い沈線によ
って地文の繩文を方形窓状に区画し、窓枠部分
を帯状にすり消して繩文施文部分が方形になるよ
うな効果を上げている。10は、1類に属し4単位の
波状口縁を有する。胴部文様は微隆起によって
区画された懸垂状文の内部をすり消したものであ
る。11は、2類に属し口縁部が外反せず、ほぼ直

口で、胴部のくびれも少ない深鉢形を呈する。沈
線区画された長円形の内部をすり消した無文帯を
縦・横に十文字形に組み合わせた文様帶により構
成される。

7は、DⅣ区-12Gの住居址(報告には住居址
番号が記されていないが、遺構分布図およびグリ
ッド設定図から考え合すると2号住居址に当た
まるのだろうか)の覆土第1層より出土したもの
である。口縁部の大きく内曲する浅鉢形土器で、
口縁部下に丸味をおびた隆帯がある。

以上が住居址内出土の土器である。他に2・4
・5・6・8の土器が報告されている。

2は、キャリバー形深鉢で口縁部を巡る微隆起
線上にも胴部と同じ繩文が施されている。

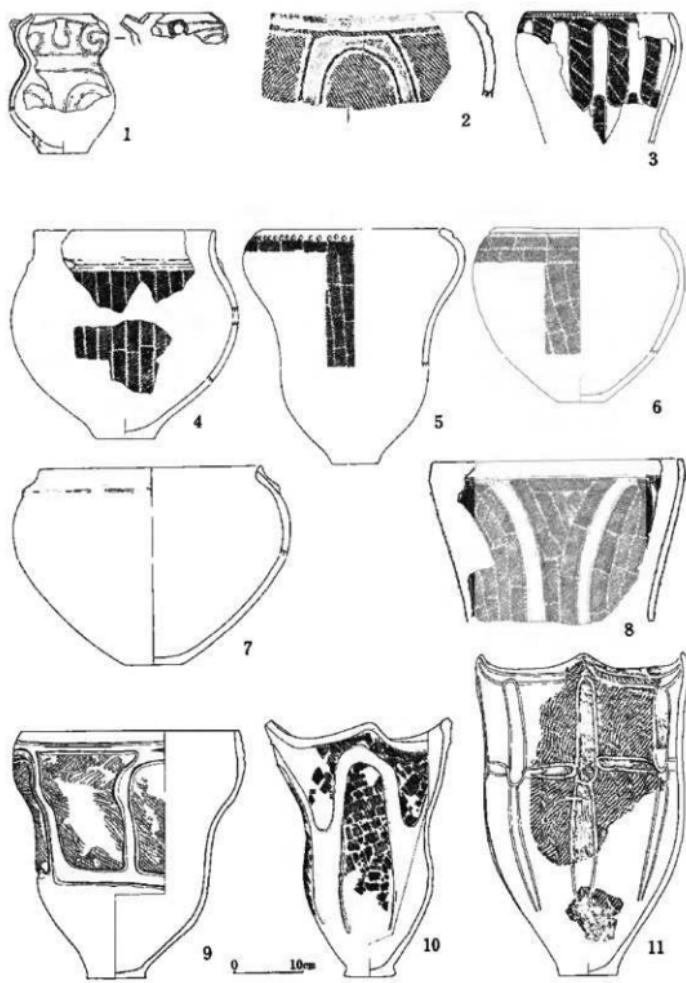
4は、口縁部の無文帯と胴部繩文との境に一条
の隆帯が巡っている。

5は、口縁直下に太めの列点文が施される。

6は、口縁直下に太めの沈線が巡っている。

8は、口縁から胴部へ向うすり消繩文による懸
垂帯は口縁部直下の瘤状突起によって区切られ、
連結しない。

以上がすき山遺跡のおもな出土土器の説明で



第2図 千葉市すき山遺跡出土の土器(『貝塚博物館紀要第5号』1972より)

ある。これらは報告では加曾利E III式期に属するとなっている。しかし、微隆起線による文様区画を持つ磨消文土器が見受けられる。所謂加曾利E VI式とされる一連のものである。現在、縄文時代中期に属する加曾利E式土器の細分、特に加曾利E式の中でも終末期の土器について加曾利E IV式の設定をめぐって様々な意見が対立している。

この型式名は神奈川県吉井城山貝塚の報文中に上部貝層（新）出土の土器をとりあげ、「加曾利E III式土器につづくもの」で「加曾利E式と称名寺式とのあいだ」を埋めるものではないかと論述したことから起源がもとめられるものであり、茨城県岩坪貝塚の報告で、B類とC類の一部の土器に加曾利E VI式の呼称を与えたことによるものである。以来、この加曇利E式土器の細分をめぐって前述したように様々な意見が出され、論議されているのである（註1）。最近では加曾利E IV式期の遺跡数が増加し、それに伴う資料の増加によりこの加曾利E IV式も編年の位置を確立したといって差し支えないだろう。

そこで、ここでは加曾利E III式・E IV式をあきらかにし、すき山遺跡出土の土器について検討してみたい（註2）。

加曾利E III式期（第3図）

該期は、口縁部文様帯が崩れ、胴部磨消文帯がせり上ってくる時期である。また、胴部磨消文帯が逆U字状を呈するものもある。

1・2は、満巻文が流れ懸垂文と一体化したもので、胴部に波状沈線が施されたものである。

3は、口縁部文様帯にU字状の文様が施されたもので、文様内部にS字状の沈線が施されたものである。

4は、沈線文によって口縁帯を区画したもので、円形・楕円形を呈す。胴部は平行沈線が施されたものである。

5は、胴部文様帯に逆U字状の磨消文帯が施されたものである。

6は、口縁部文様帯が消失したもので、口縁部を巡る平行沈線間に円形刺突文やキザミ目が交互に施されたもの。胴部は平行垂線による磨消文帯が施されたものである。

加曾利E IV式期（第4図）

該期は、口縁部文様帯の喪失したもので、微隆起線による文様区画をもつものと、沈線による文様区画をもつものである。器形が波状を呈するものには、橢状の把手がつけられるものも多い。

1は、口縁部は沈線によって無文帯が区画される。U字状・逆U字状の文様を配した土器で、文様区画は沈線で施される。

2は、微隆起帶を使用し、U字状・逆U字状・楕円形の文様が施されたものである。口縁部は微隆起帶によって無文帯が区画されるものである。

3は、口縁が波状を呈する。口縁部から胴下半にかけて微隆起帶による文様が配されている。口縁部には微隆起帶によって無文帯が区画され、無文帯は波状口縁の頂部で互いに接する。無文帯の下側には波状口縁の頂部から開始される逆U字状の文様と、谷部に位置するU字状の文様が施される。これらは沈線によって区画され、内部に縄文が施される。

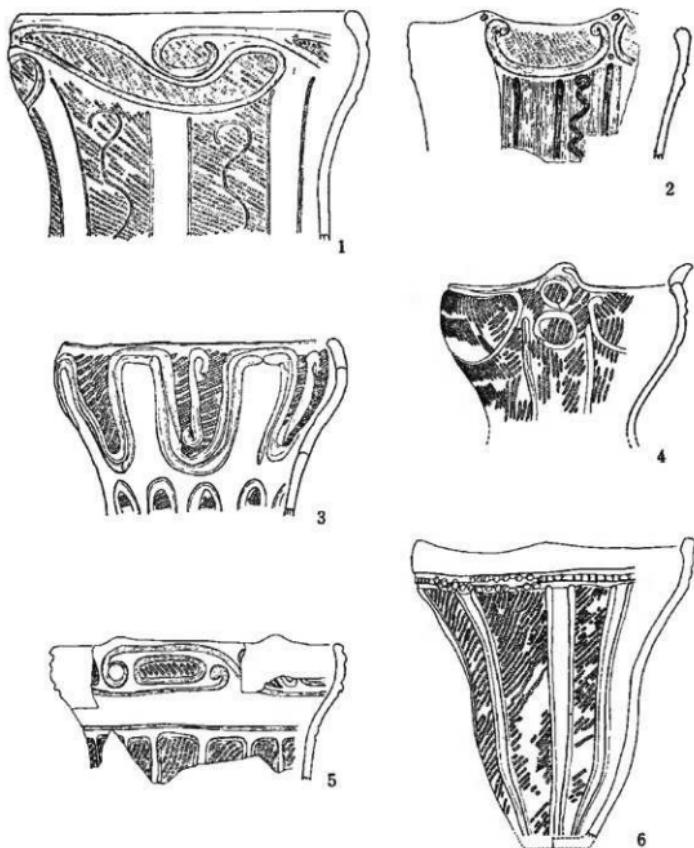
4は、柄状把手が付されたものである。口縁部にU字状の文様を配し、この間に逆U字状の文様を施したもので、逆U字状の文様は口縁部から胴下半にかけて長く配される。文様区画は微隆起帶を使用している。

この他に、口縁下に微隆起帶か沈線を廻し口縁部無文帯を施し、以下縫文を施すものや、逆三角形（鋸齒状）となった区画内に縫文を施したものもある。

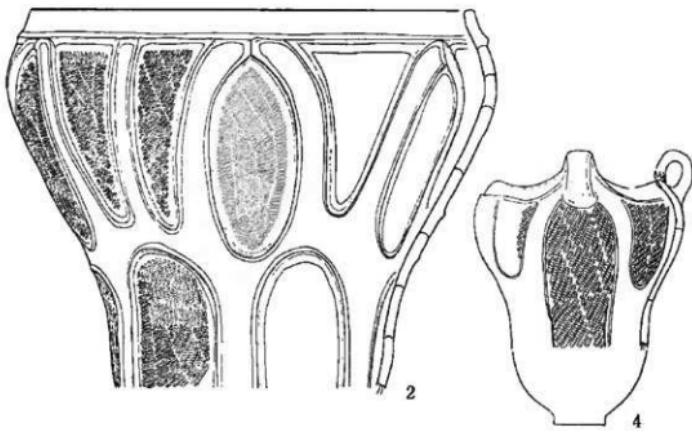
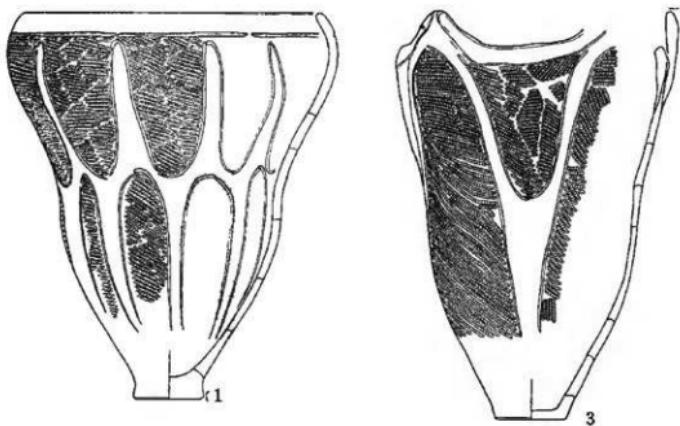
以上、加曾利E III式・E IV式を県内出土の土器を通して捉えてみた。既報のもの全部に例をあたった訳ではないので必ずしも十分であるとは言えないが、加曇利E III式からE IV式へと移る流れは胴部文様帯の拡大化により口縁部文様帯を退化させていくということを覚えるだろう。

また、第4図-3の土器は、栃木県柳沢遺跡・茨城県岩坪遺跡・群馬県梨ノ木遺跡・埼玉県田端前遺跡5住・志久遺跡8住・神奈川県当麻遺跡など、関東地方各地に存在している。同様に、第4図-1・2の土器の類型もほぼ関東地方各地に存在している。このように、加曾利E III式からE IV式への移行は、各地域独自の文様や器形が、それぞれのつり合いを失い、齊一性の強いものになつたものといえる。

以上、加曾利E III式・E IV式の説明および、それらの土器説明である。これらをもとに、すき



第3図 加曾利E田式土器
1、2、松戸市貝ノ花貝塚
3、千葉市中野御厨堂遺跡
4、佐倉市生谷境堀遺跡
5、松戸市子和清水貝塚
6、千葉市加曾利貝塚



第4図 加曾利E VII式土器（「千葉市中野宿御堂遺跡」1976より）

山遺跡出土の土器を再考してみたい。(第2図)

すすき山遺跡出土の土器は、先に書いたとおり1類・縄文地に微隆帯による懸垂状区画文を配し、その内部をすり消ししたものの。2類・沈線によるすり消し文を配したもの。3類・縄文装飾のみのもの。4類・微隆帯のみのもの。5類・無文のみのもの。と、5類に分類される。

6は、沈線のかわりに、微隆起線を巡したものとが、神奈川・東京・埼玉・千葉・茨城で両者の存在が確かめられている。このことは、同一の文様模様を有しながらも異なる表現方法をとる2者が同一地域内に存在していたことが知られるのであり、このことは、これら両者の関係が時間差あるいは個体差として処理されるべき可能性を有していく(折原、1977)。

1は、東北系のもの。信濃および東海の速弧文のかわりに影響を与えてくると言えるものである。

11は、1と同様のことが言える。

10は、第3図-3と同類型で、関東地方各地に存在している。

7は、口縁直下に丸味を帯びた隆帯がある。

以上、いくつかの土器を取りあげてみた。その結果、6・7は加曾利E III式に組み入れることが可能である。1・11は加曾利E IV式に併行されるもの。11は、9・10の土器と併存するものであり供伴關係からみて、同時期と同定しても差し支えないだろう。つまり加曾利E III式で捉えていたすすき山遺跡出土の土器の、その大部分のものが、加曾利E IV式に組み入れができるのである。

4. 住居址群について

すすき山遺跡から検出された住居址は11基を数える(表1)。これらはすべて古状合地の基部に近い西半分に偏在し、中央鞍部をさて、台地の縁辺部にのみ展開している。これらは、その床面直上の土器等によって加曾利E VI式期に属する(先に述べたように、すすき山遺跡出土の土器のほとんどが、加曾利E IV式期に属することがわかった)単純遺跡である。

千葉県における縄文時代中期終末期の遺跡は東京湾岸沿いの下総台地縁辺部に集中的に分布している。そして、これらの遺跡の中で、すすき山遺跡と同様に縄文時代中期終末期に至って集落が營

まれ、しかも、この時期に限られるという遺跡事例が多い。鹿島前・金崎台・中野木新山・中西渡台・生谷境堀・江原台(第1を含む)等が挙げられ、こうした、中期終末期單純集落は、埼玉県域にみられる傾向である(山本1980)。

しかし、埼玉の場合、柄鏡形(敷石)住居へと変化を遂げている事例が多いのに対し、千葉県域では、わずかに金崎台2号住と江原台遺跡の3基が典型的な柄鏡形を呈しているだけで、一般的な住居形態のまま、集落が営まれている。その理由として山本氏は、中期終末期單純遺跡とは別に、中期終末期に集落が営まれ始め、後期へとうけつがれる集落。特に東京湾沿岸の下総台地縁辺部に縄文時代後期以降営まれる大規模な貝塚や集落、そうした母体が、この中期終末期の集落のありかたに求められるとして、中期以来の集落の多くは中期終末期に至って、地点をかえ、集落が営まれ始め、一部は後期へとうけつがれていたといった、中期以来の集落からの脱離、集落地の移動として、中期終末期が捉えられるとした。そして、「後期集落の発達は、南関東ではなく、東京湾沿岸の下総台地縁辺部に顕著であり、この地域では、中期から後期への転換後、中期終末期を介して、比較的スムーズになされたものと理解される」とした。この中期終末期は一つの転換期ではあるが、集落の変遷上、この期を境として比較的スムーズに後期集落へと移つていったということである。

すすき山の報文の中では、すすき山遺跡が立地する台地の東側の支谷においては、大型の貝塚が集中し、すすき山遺跡の立地する支谷においては比較的小型の貝塚しか存在しないのは、両支谷に貝類の繁殖はなく、ともに「よし川」の合流地域まで下らねばならない可能性が強いので、ただ単に自然条件によるものではなく、そこに当然ながら、当時の集落相互間の人為的な社会規制が存在したことが予想される。とし、また、加曾利貝塚と滑橋貝塚との関係をみると、加曾利貝塚の北貝塚でも南貝塚でも、加曾利E III式期の貝層や住居址はほとんど確認できないのに、古山支谷をへだて対岸にその時期の貝層を伴う住居址が存在している。すなわちこの時期の集落は、大型貝塚の内部に包含されるよりは、外部に孤立して別個に存在する可能性がある。と書かれている。

つまりこのことが、山本氏の言うところの、中

期以来の集落からの脱脚、集落地の移動として、中期終末期が捉えられるということになるのだろうか。そして、中期から後期への転換期がこの、中期終末期になるのだろうか。

すすき山遺跡は、前述したように11基の住居並が検出されている。報文では、床面上に瓦層を伴うものが5基、重複するものが3基、含まれている。したがって、11基すべてが同時存在ではありえない。少なくとも2時期に分けられる。また、住居址の床面が、ソフトロームの上面までしか掘り込んでいない。周壁の立ち上がりも不明確で闇溝をもたないものが多い。柱穴列が不規則で、床面は軟弱であり踏み固められていない。等の特徴があり、これらのことから住居址内における生活の期間や、集落そのものの存続期間が永かったとは考えられない。

その他には、住居址内外における遺物の出土数が極端に少ないとあり、この集落が2時期に亘って営まれ、しかも短時期であった。ということが言わわれている。出土土器のところでは述べたようにそれらは加曾利E III式とE IV式に分けられるが、報文では全ての土器が載っておらず、また住居址出土の土器も同様に報告されていないので、土器をもってして住居址を2期（E III期とE IV期）に分けることができなかった。

5. おわりに

縄文時代中期終末期になると、土器もそれまでの独自なものから齊一化の傾向になる。同じように今までの集落が廃絶され、新に集落が開始されるが、次代後期にまで続く集落もあれば、廃絶される集落もある。その一つがすすき山遺跡であった。この中期から後期へと移行する間には様々な問題がある。すすき山も、問題が多々ある遺跡であると思う。

全くまとまりのない文になってしまった。あらためて自分の勉強不足を感じている大失であるが先学諸賢のご批判をいただければ幸いである。

（千葉市教育委員会文化課）

〔脚註〕

- (1) 加曾利E式土器の終末をE III式→E IV式と置くことについては、各研究者によってその認識の違いなどから様々な意見が提出されて

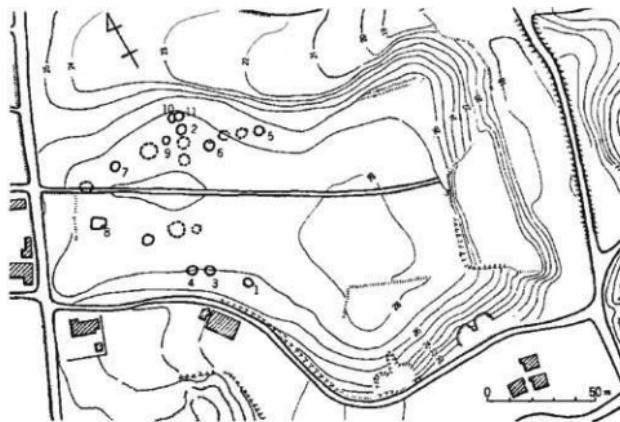
いる。また堀越氏は、これらの混亂期の研究動向について、過去の諸説を研究史的に整理したうえで、いわゆる加曾利E III式・E IV式が、E III式として統合できるものである（堀越1972a・b・C）とした意見もある。

(2) ここでは、千葉県内から出土した土器を通して、その要素を取りあげてみたのであるがもちろん県外の出土土器との比較検討は必要である。土器型式の幅年は、時間的にも地域的にも充権までおしえられなければならないのだから。

ここに取りあげた要素は、まだまだ説明不足であり、漠然とした感は否めないが、県内出土の土器から取りあげたという点をご諒承願いたい。

〈参考文献〉

- (1) 後藤和民・庄司克「千葉市源町すすき山遺跡発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』5号1972
- (2) 折原義「研究紀要」2 千葉県文化財センター（昭52）
- (3) 白石清之「加曾利E式土器の変遷」「考古学研究」25-1
- (4) 中村・青木他「千葉市中野僧御堂遺跡」千葉県文化財センター 1976
- (5) 新藤康夫「加曾利E式土器細分の再検討」「考古学雑誌」62-3
- (6) 今村啓爾「称名寺式土器の研究（上・下）」「考古学雑誌」63-1・2
- (7) 桃沼修平「加曾利E式土器終末の諸段階」「なわ」15号1 1977
- (8) 桃沼修平「縄文時代中期の研究の流れ」「なわ」17号 1979
- (9) 宮崎朝雄「加曾利E式土器について—埼玉県出土土器を中心として—」「なわ」17号 1979
- (10) 小川和博「千葉県における縄文中期末の居住形態（予察）」「なわ」17号 1979
- (11) 山本輝久「縄文時代中期終末期の集落」「神奈川考古」9号 1980



第5図 千葉市すき山遺跡の遺構分布図

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	Na
5.0 × 4.5	5.5 × 4.5	4.0 × 3.6	6.7 × 6.0	5.2 × 4.5	4.5 × 4.3	5.0 × 4.5	5.5 × 4.6	5.3 × 4.7	5.7 × 5.7	4.6 × 3.6	長持 × 短持 (=)
不明	5	不明	10 数口	8	8	6	2	7	4	4	柱穴 (○)
なし	なし	なし	なし	なし	なし	半周	全周	未確認	局部	周溝	
50 × 50	40 × 40	65 × 45	60 × 50	(攢 乱)	70 × 60	60 × 55	70 × 55	80 × 70	90 × 70	60 × 60	炉址 (=)
(加E III) 床面上土 跡片	(加E III) 覆土中土 跡片	(加E III) 覆土中土 跡片	(加E III) 覆土中土 跡片	(加E III) 床面上土 跡片	(加E III) 床面上土 石疊 3 1	(加E III) 床面上土 跡片	(加E III) 覆土中土 跡片	(加E III) 覆土中土 跡片	(加E III) 覆土中土 跡片	(加E III) 覆土中土 跡片	伴出遺物
加曾利E III	加曾利E III	加曾利E III	加曾利E III	加曾利E III	加曾利E III	加曾利E III	加曾利E III	加曾利E III	加曾利E III	加曾利E III	所属時期 (式)
貯藏穴二ヶ		貯層一ヶ所		貯藏穴と 塗墁	貯藏穴二ヶ	貯層一ヶ所	貯層二ヶ所				備 考

第1表 千葉市すき山遺跡出土住居址一覧表